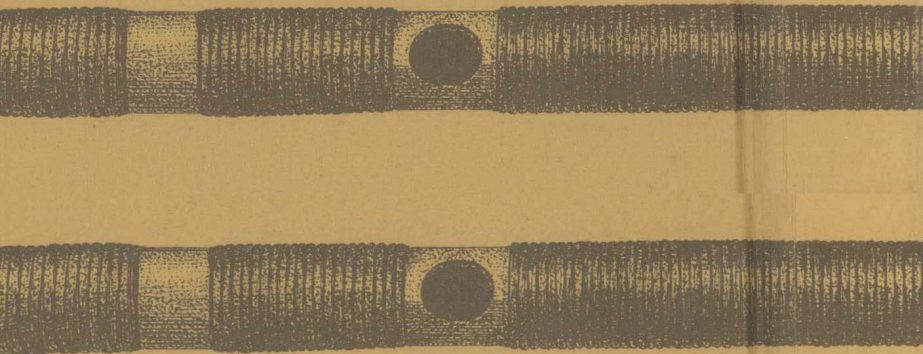


# 落城記

野呂邦暢



# 落城記

野呂邦暢

文藝春秋刊

落城記 奥附

昭和五十五年七月五日 第一刷

定価 一千円

著者 野呂邦暢のろくにのぶ △著作権継承者 納所長雄 V

発行者 杉村友一

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三—二三 郵便番号 一〇二  
電話 東京 (〇三) 二六五局 一二二一

印刷 理想社印刷所 附物印刷 精興社 製本 矢嶋製本

万一落丁・乱丁の場合はお取替えいたします



**解題** 本作品の母体となった「落城記」は文學界昭和五十四年十月号に發表された。大はばの推敵、九十四枚の加筆原稿を得た本作品が脱稿したのは著者の死（昭和五十五年五月七日）の直前であった。

# 落城記

（純文学長篇小説）

装幀 北沢知己

わたしは鍬を地面に横たえて穴の底へ半身をすべりこませた。

二尺そこそこ見当をつけて掘り始めたのに、山の芋はまだ地中に深くのびている。ただ、ずいぶんと細めになっているから、もうすぐ根の尖端へゆきあたるはずである。

鍬を入れたときは、せいぜい小半刻とさもあれば掘りとることができると思っていた。夜が明けやらぬうちに、城へもどるつもりだったのだ。今はゆうに一刻をすぎているだろう。木立のあわいがくつきりと見分けられ、墨色であった空にほのぼのとした光がみなぎっている。

「お嬢さま、ひと休みなされては」

穴の縁にもりあげた土をどけながら権助がいった。栗の木に巻きついた山芋の茎は根元から切られたために、穂のかたちをした白い小粒の花弁はもうしおれていた。権助は先ほどからたびた



びわたしに代つて山の芋を掘ろうといい張つた。わたしは耳をかさなかつた。三尺をこえ四尺、いやたとえ五尺もの長さがあろうとでも、これをわたしひとりの手で掘り取ろうと思ひ定めていた。汗みずくになつた帷子衣かたびらぎぬが氣味わるくなつたので、襷たすきをはずし、もろ肌ぬぎにした。

胸乳に巻いた晒布も汗を吸つてしとどに濡れていた。

わたしは土に埋れている山芋のまわりから手で念入りに小石を除き泥をかき出した。うす茶色がかつた白い芋は、ふとしたはずみに折れてしまふ。とちゆうで折つてはならなかつた。髭のうに細い尖端まで、まるまる掘りだそうと心に決めていた。

わたしは懐劍の鞘を払つた。山芋にからみついてゐる木の根をことごとく切つた。懐劍を使つて山芋が刺さつてゐる泥を崩し、手ですくいあげた。權助がせつかくの守り刀を芋掘りに用ゐるとは呆れはてた所業であるとおふやいた。なにごとく控えめにいうこの老人が、非難がましいせりふを口にするのは、よほど肚にすえかねたからであるにちがいない。

わたしは両手で山芋をつかみ、息をととのえて、しづかに力をこめた。

かすかな手ごたえがあつた。

懐劍を土中にさしこんで芋の四周へのびてゐる糸のような根を断ち切つた。刀の刃が石にあたつて耳ざわりな音を發した。土からぬきとつた刀は刃がこぼれていた。わたしは肩で喘いだ。にわかには胸苦しくなつた。かたく両の乳房をしめつけて巻いた晒布がわずらわしくなり、結び目を解いた。泥まみれの手を体の前後に動かして、胸を二重三重に包んでゐる白い布を剝いだ。晒布

は水に浸したように重たくなっていた。

権助がそれを受けとって絞った。

わたしは目をつむり、呼吸をととのえた。

ふたたび山芋に両手をそえ、少しずつ力を加え、手もとに引いた。数本の鬚根がちぎれる気配、そして次の瞬間、するりと山芋はぬけた。わたしは穴の縁に腰をおろし、裸の背を栗の木にもたせかけた。涼しい微風が火照った肌に心地よく感じられた。手につかんだ山芋は三尺五寸はあろうかと思われた。ついにまるごと念願の山芋を掘りとったわけである。わたしは一声意味もなく叫び、はずみをつけて穴の外へとびあがった。

権助はわたしの晒布を山裾の小川へ洗いにおりたところである。夜はすっかり明けはなれ、東のかたに深く湾入した海の上に朝日がのぞいた。日は水平線のあたりにかたまっている雲に入った。わたしは目を凝らした。

気のせいか、盃の形をしたその雲のとなりに、赤児あかどの爪に似た白い月を見たと思ったからである。しかし、雲にさえぎられても朝日の光はまぶしく、仄かな月のありかを見とどけるのはむずかしい。

きょうは七月三十日、太陽と月を同じ方角に眺められる日である。山芋掘りに疲れてしばらく心がうつろになり、ぼんやりと東の空を見まもっていたわたしが、ありもしない月のまぼろしを見てしまったのだろうか。日が昇る直前の淡い灰色の空に浮んだあえかな月。もはやどんなに目

を凝らしても、朝の光がいっぱいに満ちわたった天上に月の影は名残りさえとどまっていない。

権助が山腹をかけあがってきた。

わたしは体を拭き、手を清め、水洗いした晒布を胸に巻いた。帷子衣の袖に手を通した。馬の蹄の音がした。一騎ではない。わたしより先に気づいた権助が、崖の端に立って小手をかざした。

「服部さまのご子息でござんす」

「もう一騎は」

「つれのお方はサンチェスどの。こちらをさして参られます」

山裾にかかった服部左内は馬にはげしく鞭をくれた。けわしい山道にたじろいでか、左内の栗毛は一瞬、後脚でたちあがり、前脚で虚空を掻いた。サンチェスは鞭を使わなかった。あれが南蛮のお国ぶりというのか、上体を二つに折った奇妙なのりかたで、左内を追いぬきざま、かるがると山腹を登ってくる。城から駆けに駆けてきた証拠に、二頭とも口に泡を噛み、馬の腹は水をあびたように汗で光った。左内はわたしの前へかけあがるや馬からとびおりた。その後ろにサンチェスが控えた。

左内はわたしを射すくめるような目で見すえ、次に権助をにらんだ。肩がせわしく上下している。手で顔にふきだした汗をあららしく拭った。口を開いて何かいいかけたけれども、言葉にならない。頬がひきつっている。わたしはそしらぬ顔で、乱れた髪を束ね、手近にのびていた葛のつるを切りとって結んだ。紫紅色の花はすてるに惜しく、髪にさしてみた。

「權助っ、きさまはけしからん」

左内は大声で權助を叱りつけた。

「お嬢さまのひとり歩きはげんに禁じられておることを聞いていたであらう。きさまがついておりながら、なぜ止めたてせぬ。龍造寺の間者が野にも山にもうろついているのを知らんのか。万一のことがあれば、きさまが皺腹をいくつかき切っても申しわけたん。この不忠者」

「はあ、いかにも」

權助は這いつくばって地べたに額をこすりつけた。サンチエスはもの珍しそうにわたしの山芋をみつめている。

「けさがた、足輕どもにまじって城へ入ろうとした龍造寺の者をひつとらえて打ちはたしたばかり。その者が申すには昨夜のうちに天狗の鼻から上陸した間者が五人はくだらぬという。金比羅岳にひそんでわがご領内の情勢をさぐる肚であつたげな。しかるにきさまは所もあらうことか、お嬢さまを金比羅岳に案内してのんびりと山の芋なぞ掘りくさっておる。ふだんならともかく大いさの前であることを忘れたか」

龍造寺の間者に大殿さまの血をひく娘がとらえられ、人質になったら、御家の存亡にかかわることであると、左内はいった。わたしに面と向っていえないことを、權助にいうふりをしてうつぶんをはらしたかったのであらう。

「權助、もういい、馬をひけ」

といったわたしに左内は色をなした。膝でにじりよつて、「あまりといえは人もなげなおふるまい。大事を前にしてお嬢さまの御身にもしものことが」といいたてゐる左内をしりめに、わたしは馬上の身となつた。山芋を掘つてゐる間に権助が笹の葉をたつぷりと与えておいた馬は、腰をおとして急な斜面をすべりおりた。サンチェスが續いた。権助はわたしが馬にまたがるやいなや、はじかれたように駆けだしていた。

土を巻いて山裾へおりたつたわたしは、馬首を西の方、高城へめぐらした。しぶきをあげて小川を渡り、萱の草むらをかき分けて走つた。ややおくれて左内がついてくる。両側は田圃である。ああおとした稲がおもたげにみのつてゐる。取りいれまでわたしは生きてゐるだろうか。この稲を刈りいれた百姓が年貢をおさめるのは、はたしてわが西郷家であろうか。それともやがて攻めいる機をうかがつてゐる隣国佐嘉の龍造寺家であろうか。

稲田の中で草とりをしてゐた百姓どもが、わたしたちに気づき、あわてて笠をとつた。

「サンチェス」

「はい、お嬢さま」

「おまえは昨晚、長崎の深堀家へ帰つたと思つてゐた」

「そのつもりでありましたが、まだ鉄砲がつきませぬ」

風がわたしの懷を涼しくした。汗ばんだ肌も髪もたちまち乾くようである。わたしは鞭を馬にくれた。耳もとで風が鳴つた。わたしは天翔ける鷹であつた。弦をはなれた矢であつた。

「お嬢さま。ドン・アグステイーニョから返書は参りましたか。そのこと、私の気にかかり夜も安らかに眠られませんか」

「ドン・アグステイーニョとは小西摂津守行長様のことか」

「関白様にご領地のことでおとりなしを願われたと聞きました」

わたしは大川のほとりで馬をだく足にした。権助がおくれがちになったのである。山芋が折れないように二本の竹をあてがって縄でくくつたのを小わきに走ってくる。左内はわたしたちを追いつぬき、大川へ乗りいれて対岸へ渡った。その姿がみるみる小さくなった。村々の庄屋へ、足輕人足をさし出すよう命令しに行つたのかもしれない。しかし、稲田で立ち働く百姓どもの風情はいつもと変りがなかった。目と鼻の先に、いくさが近づいていることを知らないはずではあるまいが、御家が立ちゆくか滅びるかというときに、わたしには平然と田の草など取っている百姓どもの気が知れないのである。

前方に高城が見えた。

満ち潮どきである。

川辺の小山は頂に矢倉をめぐるし、その白壁が朝日に映えてまぶしかった。潮は小山の裾を洗い、対岸にそびえる二の丸砦の石垣も洗った。干満によつて浮き沈みするように見えるところから、古来、高城と名づけられている。わが西郷家がこの地伊佐早の主となつて二百数十年、有明海の潮は毎日あの小山の裾にさしてはひきつづけたのである。わたしは馬をとめてしばらく高城

のたたずまいに見入った。

「お嬢さま、左内どのがあれに」

わたしは向う岸に目をやった。駆けてくるのは騎乗の左内だけではなかった。馬の後ろから男がひとりひた走りに走ってくる。馬に見え隠れして人相風体がしかとわからない。左内は馬を大川におどりこませた。男はいちもくさんに水へ駆け入り、抜き手をきって、あれよという間にこちらがわの岸へはいあがった。権助はとんきような声をあげた。

「やや、これはしたり、韋駄天の虎どんでごんす」

サンチェスが聞きとがめた。

「イダテン？ はてイダテンとは何の心か」

わたしは修道士サンチェスに仏法守護神の名前を説明しても仕方がないと思った。伊佐早の地でいちばん足の早い男であるただけ教えた。

岸についた左内は馬ともども水をしたたらせながらわたしたちのまわりを一周した。虎次はわたしに目礼し、左内と一緒になおもわたしたちの周囲をまわった。ゆっくりと足踏みしながら呼吸をととのえ、言上すべき言葉の順序を考えているらしかった。数十里の道を駆けてきたからには、にわかに脚の動きを止めにくいのである。肉がひきつり、筋が切れることがあるという。しだいに足踏みをゆるめて身の凝りをほぐさなければならぬ。虎次は佐嘉へ送りこんだわが方の間者が探った龍造寺家の内情をもたらししたのである。

「虎次よい、ご苦労であつた」

権助はひざまずいて若い足輕をねぎらつた。たぶん聞えたのであろう、虎次は権助にかかるくうなずいてみせた。膝から下は草やぶを踏み渡るときに傷ついたものか無数のひっかき傷で血まみれになっている。下帯は泥にまみれ、着ている物もかき裂きだらけで若布のように破れていた。ようやく虎次はうずくまつた。左内の方に向い、次にわたしを認めて、すわり直した。赤銅色の胸がふいごのようにふくれたりちぢんだりしている。

「ただいま、虎次めは、帰りましてごんす」

「挨拶はいい。龍造寺はくるのかこないのか」

左内はいらだつていた。わたしは声をかけた。

「虎次よい、佐嘉から伊佐早まで二十里はあろう。山を越え野を渡り、夜を日についで走り帰つて参つた。遠路さだめし難儀であつたろう」

虎次はふかぶかと平伏した。権助が近くで草とりをしていた百姓から手桶の水をかりて来て虎次に飲ませた。虎次はまず口をすぎ次に手で桶の水を受けて乱れた髪をととのえた。それが終つてから、おもむろに少しずつ水を含んだ。

「申しあげまする」

「聞こう」

「龍造寺家晴公の家中は、かねてより米味噌干魚など買いいれておりましたが、このたび伊佐早



出陣のお触れが出ました。日どりは七月三十日すなわちきょう、陸と海の二手にわかれて攻め参ります。討ち入りの名分についていうところを聞けば、御家が島津征伐に参陣しなかったこと、ならびに九州へくだられた関白様のご機嫌うかがいに博多までまかり出なかったこと、よってわが西郷家は天下の御威光をおそれぬ不埒者ゆえ関白様が御家のご領地を家晴公に与え給うた由でござんす」

サンチェスが天を仰いで、両手を胸の前であわせ、目をとじて、何やらつぶやいた。この男が信じる神に祈ったのであろう。

「して、龍造寺の陣立ては、手勢の数は」

わたしは先をうながした。

「されば総大将は家晴公にて、二千五百余騎をひきいて佐嘉を発し陸路より討ちいる手はず。海よりは龍造寺ご本家の加勢内田肥後守どのが千余の勢をひきい、兵船五十艘をととのえて同日に佐嘉の今津から船出する手はずでござんす。あわせて三千五百あまり。よってくだんのごとくなり」

左内は唇をかみしめた。虎次はふたたび面おもてをあげた。

「これすなわち御家の一大事と心得まする」

わたしは馬の腹を強く蹴った。

高城めざして走った。